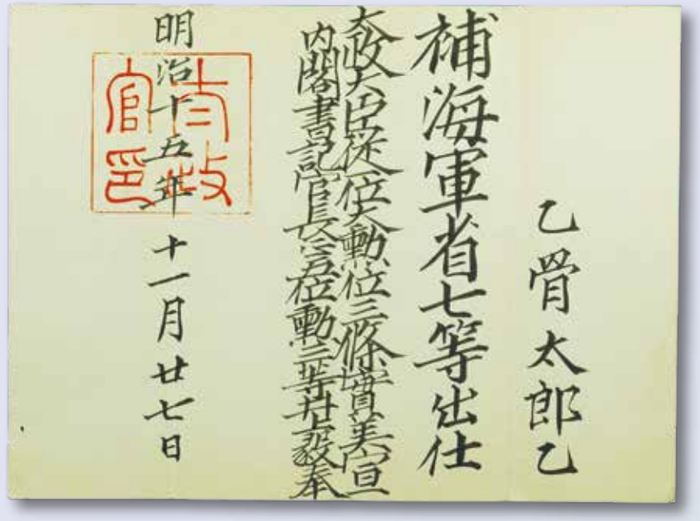
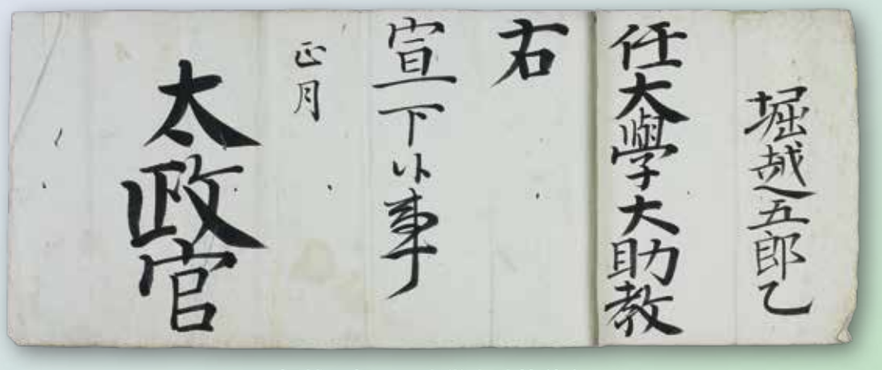
■シリーズ　沼津兵学校とその人材　105
太郎乙と五郎乙
■江原素六とその周辺　63
勝海舟の江原素六評
■令和３年度新収資料の紹介
■令和３年度当館収蔵資料の利用
■おしらせ

沼津市明治史料館通信
二〇二二年四月
通巻149号



乙骨太郎乙の海軍省七等出仕辞令
明治15年（1882）11月
当館蔵



堀越五郎乙の大学大助教辞令
明治３年（1870）１月
当館蔵

令和３年度新収資料の紹介

昨年度、明治史料館に仲間入りした資料です。

寄贈	岡本玲子様 古澤隆様 西山裕雄様	典籍類 地図「沼津案内」 金岡村長西山平治郎弔辞
購入	**旧幕臣関係** 若林好徳関係資料・石川長橋著『講本幾何学答案』・沢太郎左衛門書状（乙骨太郎乙宛）・「静岡藩御役人附　中」・堀越愛国宛辞令 13 点 **江原素六関係** 江原素六書状　２点	

購入	**沼津兵学校関係** 須藤時一郎校閲『日用簿記法』・川本清一『相馬略　上巻』・中根淑より乙骨太郎乙宛書状・杉田玄端書簡・林洞海書簡・浅田耕句読『鼇頭十八史略読本』・清華堂（大川通久）印刷発行「大日本歴史地図」・成瀬隆蔵序『実地活用帝国商業用文』・新家孝正『建築雑誌』第150号・「官板実測日本地図　北蝦夷」（沼津兵学校旧蔵書）・東宝映画パンフレット（「沼津兵学校」）

令和３年度当館収蔵資料の利用

明治史料館の資料がいろいろなところで活躍しました。

☆展示使用

６月～11月	沼津市芹沢光治良記念館企画展「『人間の運命』とその時代」（第１回）「駿河国駿東郡沼津町略図」、「米価高騰時の寄付金に対する褒状」、絵葉書「（沼津名勝）御用邸」など
６月～７月	同朋大学仏教文化研究所2021年度前期史料展示「三河大浜騒動150年」　写真「服部純」（服部綾雄・純雄関係資料）
11月～	沼津市芹沢光治良記念館企画展「『人間の運命』とその時代」（第２回）「公私経済緊縮金岡村委員会顧問嘱託書」（西沢田芹沢家）「墨塗教科書」など
２月～５月	沼津市歴史民俗資料館企画展「生魚、走ル！～沼津の海産物輸送と交易～」「沼津内浦連印之写」、「山越御印鑑之図」（獅子浜植松家文書）、『沼津の華』、『江戸名所図会』、「沼津駅発貨物列車時刻表」など
２月～３月	沼津市若山牧水記念館企画展「静岡県内にある牧水歌碑展」　歌碑拓本「幾山河こえさりゆかば…」（千本浜公園）

☆刊行物掲載

４月	「内海枡一の『放浪記』」（帝都東京と静岡編）（「日刊自動車新聞掲載」）　絵葉書「舗装した沼津駅前」など４点 南駿農業協同組合「沼津茶「素六」」チラシ　写真「江原素六」 冨川武史「嘉永・安政期における江戸湾内海御台場普請事業－伊豆石丁場所在地域との関わりから－」（洋楽史学会『洋学』第28号）「（御台場御用石切出）」（口野足立家文書）など4点 沼津の歴史と文化を耕す会「平作地蔵尊案内看板」　浮世絵「豊国　東海道五十三次之内　平作」
６月～	特定非営利活動法人沼津観光協会「御城印帳」　浮世絵「人物東海道五十三次　沼津」、「末広五拾三次　沼津」
６月～８月	伊豆の国市郷土資料館企画展「土器ドキ動物ランド」解説冊子　写真「元野牧再現模型」
７月	小松和彦編『疫病と自然災害の大衆文化史』　戸田に上陸したプチャーチン（「地震之記」より） 沼津市「広報ぬまづ」７月１日号「ぬまづの宝百選めぐり　第95回沼津兵学校」　写真「江原素六」、「石橋好一」、『体操書』など
11月～	特定非営利活動法人沼津観光協会御城印のチラシ　「北条家朱印状」（井田高田家資料） 沼津市役所産業振興部観光戦略課ふるさと納税お礼状ハガキ　浮世絵「広重画 東海道五拾三次之内 原　朝之富士」
１月	井上さつき監修『音楽と越境　８つの視点が拓く音楽研究の地平』「ピアノ輸入税ニ関スル陳情書」（旧幕臣箕輪家資料）
３月	池月映「勝海舟の補佐役　会津藩士林三郎」（歴史春秋出版株式会社『会津人群像』No.43）　写真「江原素六」 石井元章著『近代彫刻の先駆者　長沼守敬　―史料と研究』中央公論美術出版　写真「山内勝明」（原資料個人蔵）

☆テレビ等映像・その他

７月～	静岡ターミナル開発株式会社アントレ事業部　沼津駅ビルアントレ内店舗看板　浮世絵「広重画　人物東海道五十三次　沼津」、「末広五拾三次　沼津」 沼津つーしん編集部　webサイト「沼津つーしん」内記事　写真「沼津駅前通り」 沼津市役所産業振興部観光戦略課　川廓通り観光看板　「沼津略画図」、浮世絵「末広五拾三次　沼津」
３月	フジテレビ「Live News α」内企画コーナー「aism」「清水村新宿の醤油醸造店石垣家のレッテル」（興農学園旧蔵書）

おしらせ

今年は江原素六生誕180周年・没後100周年に当たります。これを記念した催しを紹介します。

新銅像建立

銅像除幕式・献茶式　令和４年５月15日（日）14:15～

江原素六生誕180周年・没後100周年記念事業実行委員会によって、JR沼津駅北口広場に、江原素六の新しい銅像が建立されます。

銅像制作　彫刻家　堤直美氏
題字揮毫　書家　杭迫柏樹氏
新銅像全高　３m90㎝

＊当日は、プラサヴェルデで記念式典・記念講演なども開催されます。
詳しくは　公益社団法人江原素六先生顕彰会事務局
電話　055-923-8333にお問い合わせください。

設置場所

沼津市明治史料館通信
第149号
令和4年4月25日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL 055-923-3335
FAX 055-925-3018
印刷　株式会社 耕文社

特別展開催

当館３階江原コーナーにおいて、令和４年５月29日（日）まで、特別展「素六が翔ぶ　江原素六の生涯と功績」を開催しています。常設展では出していなかった資料も多数展示しています。また、普段は入れない江原邸に上って、素六先生の書を間近に見ることができます。ぜひお越しください。

同時開催　４階展示室

**「江原素六学習作品展
～子どもたちが見た江原素六～」**

金岡・沢田・門池小学校の４年生が昨年度に取り組んだ学習成果の壁新聞や紙芝居等を展示しています。

令和４年５月15日（日）９:00～16:30
観覧無料です。（江原先生の命日の直前の日曜）

『図説　江原素六』が刊行されました。
A4版 オールカラー 100ページ
１冊 1,000円です。

人事異動

３月31日付で館長後藤克裕、事務補助員鈴木百合子が退職、４月１日付で館長原靖、事務補助員水谷有里が着任しました。今後ともよろしくお願いいたします。

シリーズ　沼津兵学校とその人材　105

太郎乙と五郎乙

沼津兵学校二等教授に乙骨太郎乙という名前の英学者がいた。上下に「乙」の字が付いている、変わった名前の人物である。姓はともかくとして、太郎乙という名前については、「太郎」は長男を意味し、「乙」は第二子を意味するという由来をご子孫から聞いた覚えがある。太郎・次郎・三郎が男子としての順序、甲乙丙が男女交えての子どもの出生順を表すということである。もし第三子で次男だったとすれば、「次郎丙」という名前になっていたことになる。ただし、太郎乙に姉が一人いたのは確かのようであるが、彼の弟たちの名前は、綱二・兼三・鈴之助であり、この法則は守られなかったようである。

ところで、乙骨が沼津兵学校に勤務したのと同時期、姉妹校である静岡学問所には堀越五郎乙という名前の人物が存在した。英学担当の二等教授だったという点も、乙骨と同じだった。堀越の履歴は以下の通りである。

堀越は、江戸城に勤務する諸役人のための食事を調理したり、食材を調達したりする仕事に従事した表台所小間遣やその頭をつとめた堀越平三郎の子である。安政四年（一八五七）一一月、父が西丸表台所小間遣組頭だった時、自身も小間遣の職にあった彼は、昌平黌での講義に初めて出席しており、その頃は「亀之助」と名乗っていた。やがて開成所で英学を学ぶようになったらしく、文久四年（一八六四）一月には、稽古人のうちの「点数上等」の者にその名が挙げられた。慶応元年（一八六五）には開成所寄宿寮取締出役、翌年には同教授手伝出役となっていたが、その頃は「英之助」と改名していた。たぶん、将軍家の分家田安家の当主亀之助（後の静岡藩主徳川家達）と同名であることを憚ったためであろう。慶応二年一〇月には開成所の職制改革により、二等教授方出役となっているが、本来の所属は二丸御小人だった。翌年八月、四三歳になっていた彼は、一等に昇進したらしい。

堀越の英学の師匠は、年下の秀才箕作麟祥であり、後に静岡学問所の同僚となった外山正一、沼津兵学校教授になった渡部温・乙骨太郎乙・高島茂徳・薗鑑らと同門だった。開成所時代には、堀達之助が編纂した『英和対訳袖珍辞書』の補訂を柳河春三・田中芳男らとともに担当し、慶応二年刊行の改正増補版には、主任として英文による序文を載せた。また、『中外新聞』を発行した開成所の洋学者グループ会訳社にも加わっている。

幕府瓦解後の慶応四年（一八六八）七月、徳川家の駿河移封に同行させて才能を活かすべきと

された優秀な洋学者の一人に数えられ、移住予定者の名簿「駿河表召連候家来姓名」にも「洋学教師」として氏名が記された。そして勤務することになったのが静岡学問所であり、明治二年（一八六九）九月発行の『静岡藩御役人附』では、「二等教授　英　堀越五郎乙」と掲載された。同年七月に明治政府から発せられた百官名・国名を名前に使用することを禁ずるとの指令により、それまでの「英之助」を「五郎乙」に改めたと思われる。なお、割付地（藩内での本籍地のようなもの）は三河国赤坂であったが、実際には駿府安西一丁目の民家に仮寓したらしい。

明治二年には、『改正増補英和対訳袖珍辞書』が徳川氏蔵版として、つまり静岡藩の版権の下で再刊された。しかし、堀越の静岡学問所の在任期間は短かった。明治三年一月、明治政府から徴命が下り、大学大助教に任命され、上京することになったのである。以後、大学少博士・文部少教授・太政官編輯助・文部省六等出仕などを歴任し、少なからぬ書籍の翻訳・校正を行うなど、英学者として業績を残した。大正一〇年（一九二一）に八六歳で没したとされるが、幕末時の年齢と合わないのはどういうわけであろうか。五郎乙の名を使用したのは短く、その後は「愛国」と改名している。

さて、「五郎乙」という名前のことである。どうも、同じ箕作麟祥門下の英学者であり、開成所でも同僚だったことから、堀越は乙骨太郎乙と親しい間柄であり、その影響から「乙」の字を付けた名前を名乗ったのではないだろうか。ただし、断定はできない。

実はもう一人、同じ頃に「五郎乙」という名の人物が登場していた。静岡藩立沼津病院の製煉方をつとめた石橋俊勝（八郎・竹原平次郎）の息子、明治三年二月生まれの石橋五郎乙である。俊勝の弟石橋好一は、沼津兵学校三等教授であり、やはり開成所で英学を学び教えた前歴を持っていた。これも乙骨の存在が命名に何らかの影響を与えたのかもしれない。ただし、石橋五郎乙は俊勝の長男だったが。

【参考文献】
尾佐竹猛「会訳社」（『新旧時代』第三年第三冊）
大槻文彦『箕作麟祥君伝』
『任解日録』（東京教育大学）
永井菊枝『耐軒・太郎乙　乙骨家の歴史』
『江戸幕臣人名事典』第四巻（新人物往来社）
『江戸幕府刊行物』（雄松堂出版）
『幕末教育史の研究　一』（吉川弘文館）
『昌平坂学問所日記』Ⅲ（財団法人斯文会）
『静岡市史　近代史料』（一九六九年）

（樋口雄彦）

江原素六とその周辺　63

勝海舟の江原素六評

幕臣や静岡藩士、明治の官僚・政治家として同時代を生きた江原素六と勝海舟であるが、二人の関係性はいかなるものだったのだろうか。明治三一年（一八九八）一〇月一日付の『東京朝日新聞』に「海舟雑話」と題された勝海舟の談話筆記が掲載されており、その中に以下のような一文が含まれている。

「江原素六かい、ムウあれハ徳川の旗本だつたよ、恰度江原と今一人名を忘れたが二人して多くの兵隊を率ゐて、脱走した事があつた、其時分に己れが周旋して救ふた事もあつたよ、此頃でハ自由党とか憲政党とかで、非常に利き者で大臣に成れと云ふてもイヤだと云ふとか、彼れハ別段ソー深い学者でハあるまいが、自信力の強い男と見えるよ」

明治三一年といえば、進歩党の大隈重信と自由党の板垣退助が連携し、両党が合同して憲政党ができ、六月には隈板内閣が成立したものの、一〇月には旧進歩党派と旧自由党派の対立が顕在化し、分裂への動きが始まっていた。旧自由党派の有力な代議士だった江原は、新内閣の外務大臣の候補に挙げられたものの、それを固辞したという。質問者がその件について見解を求めたのであろう、右の海舟の談話でも江原の大臣辞退のことに触れている。ただ、「非常に利き者」「自信力の強い男」と言っているのは、決してやり手・自信家といったタイプではなく、温和な人格者だった江原評としてはいかがなものか。ただ、当時江原は政治家としてもっとも活動的な時期であり、ギラギラしたところも見えたのかもしれない。一方、確固とした専門領域を持つような「学者ではない」との見方は妥当である。

戊辰の際に江原が撤兵隊を率いて脱走・抗戦したことに触れているが、海舟は当時の日記・慶応四年四月一二日条にも「撤兵頭福田八郎右衛門、江原鋳三郎等、その組下を引きて上総下総へ脱走す」（勁草書房版『勝海舟全集』19）と記しており、自身が尽力した江戸無血開城に反する動きをとった者として記憶していたようだ。名前を忘れたもう一人というのが福田のことなのだろう。周旋して救ったというのは、新政府による追及からかばったことがあったのか。

江原の周辺には赤松則良・藤沢次謙・川村清雄など、海舟と関係が深い人物がいたが、海舟本人とはあまり面識がなかったのかもしれない。また、海舟の側でも江原に対する印象が薄かったのだろうか。

この新聞記事からわずか三か月後、明治三二年（一八九九）一月一九日に海舟は亡くなった。二五日には雪の中で葬儀が執り行われ、葬列には島田三郎・河野広中・徳富蘇峰らとともに江原も加わっていた（『都新聞』明治三二年一月二六日）。交友の深さは別として、江原が一九歳ほど年長の海舟を先輩として尊敬していたのは間違いないだろう。

（樋口雄彦）